

軒もる月

樋口一葉

青空文庫

我が良人をととは今宵こよひも歸りかへのおそくおはしますよ、我が子こは早くはや睡ねぶ
 りしに歸かへらせ給たまはゞ興きようなくや思おほさん、大路おほぢの霜しもに月氷つきほりて踏ふむ足あし
 いかつめに冷つめたからん、炬燵こたつの火ひもいとよし、酒さけもあたゝめんばかり
 なるを、時ときは今いま何なん時どきにか、あれ、空そらに聞きゆるは上野うへのの鐘かねならん、
 二ふたつ三みつ四よつ、八はち時じか、否いな、九く時じになりけり、さても遅おそくおはし
 ます事ことかな、いつも九く時じのかねは膳ぜんの上うへにて聞き給たまふを、それよ
 今宵こよひよりは一時いちじづゝの仕しごと事を延のばして此このこ子こが爲ための收しう入にふを多おほくせ
 んと仰おほせられしなりき、火氣くわきの満みちたる室しつにて頸くびやいたからん、振ふり
 あぐる槌つちに手首てくびや痛いたからん。
 女をんなは破やれ窓まどの障しやうじ子ひらを開ひらきて外面そとを見みわたせば、向むかひの軒のきばに

月のぼりて、此處にさし入る影はいと白く、霜や添ひき來し身内
 もふるへて、寒氣は肌はだに針はりさすやうなるを、しばし何事も打わ
 すれたる如く眺め入りて、ほと長くつく息月かげに煙をゑがきぬ。
 櫻町さくらまちの殿とのは最早寢處もはやしんじよに入り給ひし頃か、さらずば燈火
 のもとに書物しよもつをや披ひらき給ふ、然らずば机つくゑの上うへに紙かみを展のべて靜しづか
 に筆ふでをや動うごかし給ふ、書かかせ給ふは何なにならん、何事なにごとかの御打
あは合せを御朋友おほういうの許もとへか、さらずば御母上おんはうへの御機嫌ごきげんうかゞひ
 の御状ごじやうか、さらずば御胸おむねにうかぶ妄想まうさうのすて處ところ、詩しか歌うたか、
 さらずば、さらずば、我が方わがに賜かたはらんとて甲斐かひなき御玉章おんたまづさに
 勿もつ躰たいなき筆ふでをや染そめ給ふ。
 幾度いくたび幾通いくつうの御文おんふみを拜見はいけんだにせぬ我われいかばかり憎にくしと

おぼしめ 思召すらん、拜さば此胸寸斷になりて常の決心の消えう
 せん覺束なさ、ゆるし給へ我れはいかばかり憎きものに思召
 されて物知らぬ女子とさげすみ給ふも厭はじ、我れは斯る果敢な
 き運を持ちて此世に生れたるなれば、殿が憎しみに逢ふべきほど
 の果敢なき運を持ちて此世に生れたるなれば、ゆるし給へ不貞の
 女子に計はせ給ふな、殿。
 ひせん 卑賤にそだちたる我身なれば初めより此上を見も知らで、世
 間は裏屋に限れるものと定め、我家のほか天地のなしと思はゞ、
 はかなき思ひに胸も燃えじを、暫時がほども交りし社會は夢
 に天上に遊べると同じく、今さらに思ひやるも程とほし、身
 は櫻町家に一年幾度の出替り、小間使といへば人らしけれ

ど御寵愛には犬猫も御膝をけがすものぞかし。

言はゞ我が良人をはづかしむるやうなれど、そもく御暇を

賜はりて家に歸りし時、聳と定まりしは職工にて工場が

よひする人と聞きし時、勿躰なき比較なれど我れは殿の御地位

を思ひ合せて、天女が羽衣を失ひたる心地もしたりき。

よしや此縁を厭ひたりとも野末の草花は書院の花瓶に

さゝれんものか、恩愛ふかき親に苦を増させて我れは同じき地

上に彷徨はん身の取あやまちても天上は叶ひがたし、若し

叶ひたりともは邪道にて正當の人の目よりはいかに汚らは

しく淺ましき身とおとされぬべき、我れはさても、殿をば浮世に

譏らせ參らせん事くち惜し、御覽ぜよ奥方の御目には我れを憎

しみ殿とのをば嘲あざけりの色いろの浮うかび給たまひしを。

女子をなごの太息といきに胸むねの雲くもを消けして、月つきもる窓まどを引ひきたつれば、音おとに目め

ぎめて泣なき出いづる稚をさなご兒ごを、あはれ可愛かはゆしいかなる夢ゆめを見みつる乳ちま

ゐらせんと懐ふところあくれば笑ゑみてさぐるも憎にくからず、勿もつたい躰たいなや此こ

子こといふ可愛かはゆきもあり、此これ子が爲ため我が爲ため不自由ためふじいうあらせじ憂うき事ことの

なかれ、少すこしは餘裕よゆうもあれかしとて朝あさは人ひとより早はやく起おき、夜よは此こ

ののとほ通り更ふけての霜しもに寒さむさを堪こらへて、袖そでよ今いまの苦勞くらくらうはつらくとも暫し

時ばしの辛しんぱう抱うぢやうぞしのべかし、やがて伍ごちやう長ながの肩かた書がきも持もたば、鍛たんこ

工うぢやう場ばの取とり締しまりとも言いはれなば、家いへは今いま少すこし廣ひろく小女こをんなの走はし

り使づかひを置おきて、其そのかよわき身みに水みづは汲くまさじ、我われを腑ふ甲が斐ひな

しと思おもふな、腕うでには職しよくあり身みの健すこやかなるに、いつまで斯かくてはあ

らぬものをと口癖くちぐせに仰あふせらるゝは、何處どこやら我が心の顔かほに出いで、
卑いやしむ色の見みえけるにや、恐おそろしや此大恩このだいおんの良人をに然さる心こころを持も
ちて苟かりにも其色そのいろの顯あらはれもせば。

父ちちの一昨年をうせたる時ときも、母ははの去年きよねんうせたる時ときも、心こころからの

介抱かいほうに夜よるも帶おびを解とき給たまはず、咳せき入いるとては脊せを撫なで、寢ねがへ

るとては抱起だきおこしつ、三月みつぎにあまる看かん病びやうを人手ひとでにかけじと思お

召ぼしめしの嬉うれしき、それのみにて我われは生しやう涯が大事だいじにかけねば

なるまじき人ひとに不足ふそくらしき素振そぶりのありしか、我われは知しらねど然さも

あらば何なんとせん、果敢はかなき樓閣ろうかくを空くうちゆう中ちゆうに描えがく時とき、うるさし

や我名わがなの呼聲よびこゑ、袖そで、何なにせよ彼かせよの言いひ附つけに消けされて、思おもひこゝ

に絶たゆれば恨うらみをあたりに寄よせもやしたる、勿もつ躰たいなき罪つみは我わが心こころ

よりなれど 櫻さくらまち 町の殿とのといふ面おもかげなくば胸むねの鏡かがみに映うつるものも
 あらじ、罪つみは我身わがみか、殿とのか、殿とのだになくば我わが心こころは静しづかかなるべき
 か、否いな、かゝる事ことは思おもふまじ、呪咀じゆその詞ことばとなりて忌いむべきものを。
 母はが心こころの何方いづかたに走はしれりとも知らで、乳ちに飽あきれば乳房ちぶさに顔かほを
 寄よせたるまゝ思おもふ事ことなく寐ね入りし兒ちごの、頬ほは薄うす絹ぎぬの紅べにさしたるや
 うにて、何事なにごとを語かたらんとや折をり々く曲まぐる口元くちもとの愛あいらしさ、肥こ
 えたる腮あごの二重ふたへなるなど、斯かる人ひとさへある身みにて我われは一一ふたごころ心こ
 を持ちて濟すむべきや、ゆめさら一一ふたごころ心こは持もたぬまでも我わが良人をつと
 を不足ふそくに思おもひて濟すむべきや、はかなし、はかなし、櫻さくらまち 町まちの名な
 を忘れぬ限かぎり我われは一一ふたごころ心この不貞ふていの女子をなごなり。
 兒ちごを静しづかに寢床ねどこに移うつして女子をなごはやをら立たち上あがりぬ、眼まなざし定さだま

けて口元かたく結びたるまゝ、疊の破れに足を取られず、心ざ
 すは何物ぞ葛籠の底に藏めたりける一二枚の衣を打返して
 浅黄縮緬の帯揚のうちより、五通六通、數ふれば十二通
 の文を出して元の座へ戻れば、燈のかげ少し暗きを捻ぢ出す手も
 とに見ゆるは殿の名、よし慝名なりとも此眼に感じは變るまじ、
 今日迄封じを解かざりしは我れながら心強しと誇りたる淺は
 かさよ、胸のなやみに射る矢のおそろしく、思へば卑怯の振舞
 なりし、身の行ひは清くもあれ心の腐りの棄難くば同じ不貞の
 身なりけるを、卒さらば心試しに拜し參らせん、殿も我
 心を見給へ、我が良人も御覽ぜよ。

神もおはしまさば我家の檐に止まりて御覽ぜよ、佛もあらば我

が此この手元てもとに近ちかよりても御覽ごらんぜよ、我が心こころは清すめるか濁にごれるか。
 封ふうじ目めとききて取とり出いだせば一ひと尋ひろあまりに筆ふでのあやもなく、有ありが
 難たき事ことの數かず々々く、辱かたじけなき事ことの山やま々々く、思おもふ、戀したふ、忘わすれがたし、
 血ちの涙なみだ、胸むねの炎ほのほ、此これら等の文字もじを縦じゆう横わうに散ちらして、文字もじはやが
 耳みみの側わきに恐おそろしき聲こゑもて呶さぐくぞかし、一いつ通つうは手てもとふるへて
 卷まき收をさめぬ、二に通つうも同おなじく三さん通つう四し通つう五ご六ろく通つうよりは少すこし顔かほの色いろ
 かはりて見みえしが、八はつ、九く、十じつ通つう、十二じふ通つう、開ひらきては讀よみよ
 みては開ひらく、文字もじは目めに入いらぬか入いりても得えよまぬか。
 長たけなる髪かみをうしろに結むすびて、古ふるたる衣きぬになえたる帶おび、窶やつれたり
 とも美貌びぼうとは誰たが目めにも許ゆるすべし、あはれ果敢はかなき塵ちり塚づかの中なかに
 運命うんめいを持もてりとも、汚きたな垢よごれは蒙かうらじと思おもへる身みの、猶なほ何處いづこに

か悪魔あくまのひそみて、あやなき物ものをも思おもはするよ、いぎ雪ゆきふらば降ふ
 れ風かぜふかば吹ふけ、我が方寸ほうすんの海うみに波なみ騒さわぎて沖おきの釣つり舟ふねおもひ
 も亂みだれんか、風なぎたる空そらに鷗啼かもめく春日はるひのどかになりなん胸むねか、櫻さ
 くらまち 町とのが殿おもの面影おもかげも今いまは飽あくまで胸むねに浮うかべん、我が良人をが所しよ爲ゐ
 のをさなきも強しひて隠かくさじ、百ひやく八はち煩ぼん惱なう自のづから消きえばこそ、殊こ
とさらに何なにかは消けさん、血ちも沸わかば沸わけ炎ほも燃もえばもえよとて、微び
せうを含ふくみて讀よみもてゆく、心こゝろは大おほ瀧だきにあたりて濁じよく世せの垢あかを流なが
 さんとせし、某それの上しやう人にんがためしにも同おなじく、戀こひ人びとが涙なみだの文も
じは幾いく筋すぢの瀧たきの迸ほとしにも似にて、失うしはん心こゝろ弱よわき女子をなならば。
そば傍はたには可愛かはき兒ちごの寐姿ねすがたみゆ、膝ひざの上うへには無む情じやうの君きみよ我われを
うちす打捨たまて給たまふかと、殿とのの御聲おんこゑありく聞きえて、外面そとには良人をや戻もど

らん更けたる月に霜さむし、たとへば我が良人今此處に戻らせ給ふとも、我れは恥かしさに面あかみて此膝なる文を取かくすべきか、恥づるは心の疚しければなり、何かは隠さん。

殿、今もし此處におはしまして、例の辱けなき御詞の數々、

さては恨みに憎みのそひて御聲あらく、さては勿躰なき御

命いまを限りとの給ふとも、我れは此眼の動かんものか、此胸

の騒がんものか、動くは逢見たき慾よりなり、騒ぐは下に戀し

ければなり。

女は暫時恍惚として其すゝけたる天井を見上げしが、孤

燈の火かけ薄き光を遠く投げて、おぼろなる胸にてり返すやうな

るもうら淋しく、四隣に物おと絶えたるに霜夜の犬の長吠すご

く、隙間すきまもる風かぜおともなく身みに迫せまりくる寒さぶさもすさまじ、來こし方かた
 行く末すゑおもひに忘わすれて夢路ゆめぢをたどるやうなりしが、何なにものぞ佛ほとけに
 その空うつろ虚むねなる胸むねにひゞきたると覺おぼしく、女子をなごはあたりを見廻みまはして
 たかわら高く笑わらひぬ、其身そのみの影かげを顧かへりみて高く笑わらひぬ、殿との、我わが良を人つと、我子わがこ、
 高く笑わらひぬ、其身そのみの影かげを顧かへりみて高く笑わらひぬ、殿との、我わが良を人つと、我子わがこ、
 これや何なにも者ものとて高く笑わらひぬ、目めの前まへに散ちり亂みだれたる文ふみをあけて、
 やよ殿との、今いまぞ別わかれまゐらするなりとて、目元めもとに宿やどれる露つゆもなく、
 おもき思おもひ切きりたる決けつ心しんの色いろもなく、微笑びせうの面おもての手てもふるへで、一いつ、
 通う二に通つう八九はつ通つう、殘のこりなく寸斷すんだんに爲なし了をはりて、熾さかんにもえ立た
すみびなかうちこうちこ
 つ炭火すすの中なかへ打うち込こみつ打うち込こみつ、からは灰はひにあとも止とどめず煙けぶりは
そらたなびき
 空そらに棚たな引びき消きゆるを、うれしや我わが執しふちやくのこ
ちなが
 眺ながむれば、月つきやもりくる軒のきばに風かぜのおと清きよし。

青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第一巻」新世社

1941（昭和16）年7月18日発行

1942（昭和17）年4月10日再版

底本の親本：「校訂一葉全集」博文館

1897（明治30）年1月9日発行

1897（明治30）年6月再版

初出：「毎日新聞」

1895（明治28）年4月3、5日

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：岡村和彦

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

軒もる月

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>